

冠詞の用法 — 「制限的用法の関係詞節が 続くと先行詞は定冠詞を伴う」という 「規則」への対処のしかたに関する一考察

坂 井 孝 彦

1. 緒言

多くの規則がそうであるように冠詞用法についての規則も真実を百パーセント伝えているわけではない。「名詞の後にその名詞を限定する節が続くと、その名詞には the をつける (=制限的用法の関係詞節が続くと先行詞は定冠詞を伴う)」という規則もその一つである。

(例1) 熊山晶久 (1985 : 237) : 形容詞節が、前にくる名詞を修飾すると、その名詞は「形容詞節によって叙述された範囲内の意味を持つ名詞」となり、被修飾語の名詞は限定された意味を持ちますから、特殊化します。その特殊性を表わすために the が必要になります。

(例2) Roger Berry (1993 : 30) : The definite article is also used with nouns when it is the phrase or clause following the noun (rather than a previous word or the general situation) which indicates which thing the noun refers to. Nouns with phrases or

clauses after them are said to be qualified.

《意訳：（定冠詞はいろいろな場合に名詞につけるが）次の場合にも定冠詞を名詞につける：書き言葉や話し言葉のなかのある名詞に the をつける場合に、その the をつけた名詞がいったい何を指しているのかを考察してみると、その書き言葉や話し言葉のなかですでに使った語を指示したりあるいは一般状況を指示したりする場合があるが、そうではなくてなんとその名詞に後続する句や節をその名詞が指示する場合がある。そしてこの場合にもその名詞に定冠詞がつけられる。句や節が後続している名詞は「修飾されている」とよばれる》

しかし、先行詞を含めてある名詞句が定冠詞を要求するか不定冠詞を要求するかは、実は後続する節には関係なく、それぞれの冠詞の用法によって決まる。

次の (1a) (1b) はどちらも正しい英語である。しかし両者の意味は異なる。

(1a) This is <the house that Jack built>.

(1b) This is <a house that Jack built>.

(1a) は、「ジャックが生涯で建てた家は一軒である」または「いろいろな人が建てたある一群の家々＝{集合：ジャック建立の家，トム建立の家，ビル建立の家，.....} のなかでこの家はジャックが建てた家である」というメッセージである。一方，(1b) は、「ジャックは2軒以上の家をたてて、これはそのうちの1軒である」というメッセージである。

(2a) This is <the house I was born in>.

(2b) (*) This is <a house I was born in>.

(2a) では、生家は一箇所である。(2b) では、生家は二箇所以上となる

ので、冗談ならともかくも普通は不可能であるのでこの文は非文となる。

(3a) I want <a man who speaks Chinese>.

(3a) の a は「中国語を話す男性」=A, として, {A (1), A (2), A (3), A (4),} という同質集合が意識されており, この集合のなかのどの「中国語を話す男性」であってもよい, という場合に使う。

(3b) I want <the man who speaks Chinese>.

(3b) の the は, 次のような場合に使う:

(1) 話し手と聞き手の間で「中国語を話す男性」と言えば誰を指すか了解できている場合で, 談話が生じている環境では「中国語を話す男性」といえば前に話し手と聞き手の両人がすでに会ったことのあるあの男性のことであるとわかっている, あるいは聞き手にすでにその男性のことを話し手から耳にしたことがあって, 今, 話し手が指している男性が誰のことをかを了解できる, というような場合である。

(2) 話し手は{中国語を話す男性, 英語を話す男性, 韓国語を話す男性, ドイツ語を話す男性,}のような異質集合を認識しながらこの集合のなかのとくに「中国語を話す男性」を特定指示する場合である: 「うちで欲しいのは, 韓国語や英語やドイツ語などをしゃべる男じゃなくて中国語のできる男なんだよ」

「(3b)の文において, man の後にこれを限定する節(who speaks Chinese)を後続させたので, その結果この man は限定をうけることになるからその限定をあらわす指標として the をつけた」というような機械的・逆流的な英文構成の仕方は, 自然な英文を作成しようという場合の障害となる。英文は本来, 左から右へと自然に流れるので, この順流にさからう発想をしている限りは英文の感覚を, ひいては英語を母語とする人々の感覚を共有することはできない。

定冠詞の用法は、(1) anaphoric reference [前方照応]、(2) indirect anaphoric reference [間接前方照応]、(3) situational reference [場面状況照応]、(4) cataphoric reference [後方照応]、(5) generic reference [総称] のようによく分類される。(たとえば 'Douglas Biber, and others (1999: 263-267) *Longman Grammar of Spoken and Written English*, Pearson Education Limited' はこの分類に基づくコーパス分析をしている)。

この分類のうちの「後方照応指示」という項目は「制限的用法の関係詞が続くと先行詞は定冠詞を伴う」という「誤解を招く規則」の拠り所となりがちである。マーク・ピーターセン (1988: 12) 風にいえば「名詞句に a や the がつく」のではなくて「先行して意味的なカテゴリーを決めるのは a や the であり、そのカテゴリーに適切な名詞句が選ばれるのはその次である。」冠詞は名詞句につくアクセサリーではないし、英語はその流れの後方から考えて話したり書いたりするものではないからである。

以下、冠詞の誤用を減らすための方策を提言する。冠詞が英語を母語とする人々にどのように意識されているのかについて明らかにしてゆくための方策のひとつとして同質集合、異質集合のような集合の概念を導入してみたい。あわせてひろく参考書や辞書などにおいてもこの考え方やこれにもとづく説明・解説が導入・普及されてゆくことを希求したい。

2. 冠詞と＜制限的用法の関係詞節が後続する名詞句＞との関係

2-1. ある名詞句が話し手・聞き手に known の場合に the という標識を使うことができる。

(1a) This is <the interesting book my father bought last month>. ↑ (話し手にも聞き手にも既知の情報)

「これは父の購入した本です。

(あなたもご存知のはずの例のあの「父の購入した本」です)

2-2. ある名詞句が話し手に known であり聞き手には unknown であるが、その名詞句が<inclusive [=それで全部]>である場合は、「それで全部、ほかに同じものはない、これですべて」を表わす “the” という標識を使うことができる。

2-2-1. 名詞句が単数の場合：

(2a1) This is <the book my father bought last month>.

=This is <the only one book my father bought last month>.

「これは父の購入したたった一冊の本です。(それで全部です、ほかに同じものはない。)」

(2a2) This is <the book my father bought last month>.

「これは、({父の購入本, 母の購入本, 弟の購入本,}) というような話し手が認識・意識する<異質集合>の中で母や弟などが購入した本ではなくて) 父が購入した本です」

(「購入した一冊」はそれで全部、一冊だけ、ほかに同じものはない、ということも示唆されている)

2-2-2. 名詞句が複数の場合：

(2b1) Book A and book B are <the books my father bought last month>.

=These are all <the books my father bought last month>.

=These are all of <the books my father bought last month>.

(それで全部という総和をあらわす場合)

「A という本と B という本は父が先月購入した本で、それで全部です。ほかに同じ二冊はありません。」

(2b2) Book A and book B are <the books my father bought last month>.

=These are <the two books my father bought last month>.

「本 A も本 B も父が先月購入したものです

(母や弟やほかのひとが購入した本ではありません)」

(「購入した二冊」は、それで全部である、ほかには同じ二冊はない、ということも示唆されている)

2-3. ある名詞句が, 話し手に known であって聞き手に unknown であるが, その名詞句が<inclusive[それで全部]>ではない場合は, “the” という標識を使うことはできない。

この場合には(名詞句が単数のときは)「それで全部というわけではない, ほかに同類のものがある」ということを表わす “a” という標識を使う。

(名詞句が複数のときは)「無冠詞」という標識をつかう。(「無冠詞」の意味: “a” の複数形は存在しないので, “a” をつけない, つまり無冠詞にする表現を, あえて「無冠詞」という標識をつけた表現, と記した。例: “a book と __ books”)

2-3-1. 名詞句が単数の場合

(3a) This is <a book my father bought last month>.

↑ (話し手に既知で聞き手には未知 [新出] 情報)

=This is one of <the books his father bought last month>

「これは {父の購入本(1), 父の購入本(2), 父の購入本(3),} の
ような<同質集合>のなかのうちである一冊です。」

2-3-2. 名詞句が複数の場合

(3b) Book A and book B are <(φ) books my father bought last month>.

(φ: 無冠詞の意)

=These are two of <the books my father bought last month>.

=These are some of <the books my father bought last month>.

=These are among <(φ) (various) books my father bought last month>.

=These are among <the books my father bought last month>.

「本 A と本 B は, 父が先月購入した本です。」

(その二冊は父が先月購入した三冊以上のなかのどれかです)」

2-4. ある名詞句が話し手・聞き手の双方に unknown の場合にも, “a” という標識をつかうことができる。「話し手に unknown」とは, 話し手が対応物の「種類・属性」には言及するけれども具体的な対応物を個体として意識・認識していない場合を言う。

(4a1) Do you know <a knife which cuts well>?

「よく切れるナイフをご存知ないですか」

(4a2) Have you got <a book that would tell me what to do>?

「何をすべきかということを教えてくれそうな本を持っていますか」

3. 冠詞と＜非制限的用法の関係詞節が後続する名詞句＞ との関係

前節（第2節）に述べた内容との比較のために、関係詞節が非制限的用法の場合には“the”, “a”をどのように使えばよいかについて追記考察する。

3-1. “the” を使う場合

This is <the interesting book>, *which my father bought last month.*

(*which* 以下は追加情報 [新出情報：注釈・補足説明など])

(第一義) interesting book が話し手・聞き手に known の場合：

「これは、ご存知の(はずの)例の本です。

(参考までに言いますと) それは父が先月購入したものです。」

(第二義の1) interesting book が話し手に known であり聞き手には unknown であるが、interesting book が「それで全部で、ほかに同じものはない」場合：

「これは、たった1冊だけしかない面白い本です。ほかに同じものはありません。(参考までに言いますと)それは父が先月購入したものです。」

(第二義の2) 「これは、面白い本やつまらない本やいろいろな本があり

ますが、そのなかにあって、“面白い本”です。(参考までに言いますと)それは父が先月購入したものです。」

3-2. “a” を使う場合

This is <an interesting book>, *which my father bought last month.* (話し手に既知, 聞き手に未知)

(*which* 以下は追加情報 [注釈・補足説明など])

interesting book が話し手に known であって聞き手に unknown であるが、「それで全部というわけではない、ほかにも同類のものがある」ということを表わす場合は“a”という標識を使う。

「これは(私の認識では)あなたはその具体的な対応物についてはご存知なかったはずのある面白い本で、面白い本はほかにもあるのですが、その面白い本のある一冊です。(参考までに申し上げますと)それは父が購入したものです。」

(補足: 事物を初めて紹介するときや事物についての説明をしたり情報を提供したりするときに“a”を使う場合は、話し手が指示物を個体として認識しているのであれば、つまり、話し手に既知であれば、“it”, “she”, “he”, “関係代名詞の *which* (上記の例では *an interesting book = which*)”などで再度言及することが可能である。)

3-3. (*) Do you know <a knife>, *which cuts well*?

ある名詞が話し手にも聞き手にも未知の場合は、非制限的用法にすることは出来ない。「話し手にとって未知」とは、話し手が対応物の「種類・属性」には言及することはできても具体的な対応物を意識できない場合である。話し手はその具体的指示物を認識していないのでその実体に対して注釈・意見・補足説明などの新情報の追加をすることは不可能である。だから、関係詞節としては非制限的用法を後続させることは出来ない。つまり、

この場合は必然的に制限的用法を使うことになる。

(補足：この場合、対応物に再度言及したいときは“it”ではなくて“a”をもう一度使うか、または“one”を使う：“Get me <a car>. I want <a car>.”)

4. 冠詞と<限定語句が後続する“名詞 [名詞句]”>との関係

中原道喜 (1997: 210) は「限定語句のつく名詞には the を用いる」として、つぎのような例文をあげている：

The capital of England is London.

しかし「修飾語句がついても定冠詞が用いられるとは限らない」とする注記を追加して次のような用例を示している。

(1a) I met the teacher in charge of our class. (担任の先生) [特定者]

(1b) I met a teacher of our school. (この学校の先生) [不特定者]

[特定者] には the を使い [不特定者] には a を使う、という以上のような説明は多くの教科書や参考書にみられる。

この説明をさらに進めてつぎのような考察をしてみると、英語を母語とする人々の冠詞に対する感覚をさらに鮮明に把握することができる。

(1a) では、話し手は聞き手に対して、*the* という標識によって名詞句の“teacher in charge of our class”を、「一人しかいない担任の先生で、しかも一人だけで全部であり他には同じ人はいない」ということを認識しながら発話している。

(1b) では、話し手は<この学校の先生(1), この学校の先生(2), この学校

の先生(3), この学校の先生(4), ...>のようなく同質集合>の中のどれかひとりを意識して発話している。

the は、次にくる名詞または名詞句にかかわる数・量の“全部 (inclusive)”であり、ほかには同一のものはない、ということをあらわす指標である。つまり「総和」ないしは「総括」といわれる概念に相当する。次にくる名詞（ないしは名詞句）が単数形なら一つだけないしは一人だけを表わしそれで全部でほかには同一人・同一物はないのだ、ということを伝える。複数形なら複数個ないしは複数人全部の総和ないしは総括の数・量を表わす。不可算名詞や不可算名詞句の場合もその名詞や名詞句の数・量の全部を表わす。

したがって、最近の学校でよくみられる「担任が二人いるクラス」では、次の (1c) の表現が可能で「二人いる担任の二人ともに会った（二人で全員であり、ほかには同じふたりはいないその二人に会った）」ことを含意する。担任が二人いるクラスの場合で、次の (1d) のように表現すれば「二人いる担任のうちの一人に会った」ことになる。

(1c) I met the teachers in charge of our class.

(1d) I met a teacher in charge of our class.

=I met one of the (two)teachers in charge of our class.

(2a) the principal of a high school

(2a) では、話し手は *the* という標識を使って ‘principal of a high school’ という名詞句を「校長は一人、それで全部 (inclusive) である、ほかには同じひとはいない」と意識している。なぜかといえば、たいていの学校では校長は通常ひとりだけだからである。

話し手は、また、{当学校の教員の集合：校長，教頭，教師(A)，教師(B)，教師(C)，.....}のような異質集合を意識あるいは認識して、この集合のなか

の特に校長というエレメントを指示同定して the という標識を使う。この場合の話し手のメッセージは「教頭ではなくて、教師(A)でもなくて、教師(B)でもなくて、教師(C)でもなくて、校長ですよ」というほどの感じになる。

(2b) a high school principal

(2b) では、話し手は {校長先生の集合： 校長 1, 校長 2, 校長 3, 校長 4, ...} を意識してこの同質集合のなかのある任意の一人を想定している。

5. <聞き手にとって known である想定される情報の認知レベル>と情報追加との関係

談話が生じている環境で「父の購入本」と話し手が発話しようとするとき、話し手は聞き手がどの「父の購入本」を指すのか了解できるはずである、と考えれば、the という指標を使う。話し手は<聞き手が了解できそうな程度>あるいは<聞き手の known の認知レベル>を推し量る。話し手は the という指標をつかうことによって聞き手が了解できるはずだと思ふ情報を伝えようとする。

ある名詞または名詞句がそのまま単独で「聞き手にとって known である」と話し手が想定する場合は、その名詞または名詞句に情報の追加は不要である。しかし、「聞き手にとって known である」とするために情報の追加が必要であると話し手が判断する場合には、その名詞または名詞句の直後に“修飾語 [postmodifier]”を後置接触させてその意味内容をせまくしてゆく。そうすれば、聞き手は先行詞を含む名詞句が何を指しているのかを了解しやすくなる。いいかえれば、話し手の側から修飾語を追加することによってある名詞または名詞句の指している意味内容を限定したり特定したりしてゆけば、聞き手は話し手の伝えようとする情報の内容を理解し

やすくなる。〈情報追加〉とは、つまり、ある名詞または名詞句に修飾語を後置させることである。そして、後置修飾語とは〈広義の形容詞〉に相当する。

〈情報の追加〉＝〈修飾語の後置〉には、次のような手段がある：

- ① 関係詞節（制限用法の関係詞節＝形容詞節）を追加する。
- ② 形容詞句（前置詞句のうちで形容詞のような働きをする句）を追加する。
- ③ 不定詞（形容詞のような働きをする不定詞）を追加する。
- ④ 分詞（形容詞のような働きをする分詞）を追加する。
- ⑤ 同格の名詞を追加する。（例：He wrote a book with the title "I am a cat."）

5-1. ある名詞または名詞句が単独で、聞き手にとって known であると話し手が考える場合：この場合は情報追加は不要である。

(1) 絶対的な一個 (unique)：

- ・ the sun, the solar system, the Second World War など。
- ・ And we're one of the most generous nations in the world.

(2) 前に述べたもの・ことを指すとき：

- ・ But then I came on a man playing a harp. It was a black harp...and the man was dressed as a gorilla!

(3) 前に述べたもの・ことを指して他の名詞でいいかえるとき：

- ・ I have rented a house; the rent is very cheap.

(4) 場面状況から何を指しているのかわかるとき：

- ・ "Pass the salt."

・ A: What are you doing? B: I'm putting away the toys. (おもちゃのすべて)

(5) 場面状況をひろく考えて何を指しているのか聞き手にとって known

なとき：

- I've got to collect my husband from the station.
- the street, the neighborhood, the district, the country など.

5-2. ある名詞または名詞句がそれのみで、聞き手にも多分 known だろうけれども、話し手のほうでその自信がないときは、後置修飾語を親切心から追加した名詞句とすることによって聞き手にも known とする：

A: Where are you headed? B: The <airport at Narita>.

<the airport>だけでも相手にはどの空港であるかもわかるかもしれないが<The airport at Narita>として相手にも完全に known とする.)

5-3. ある名詞についてそれのみでは<聞き手には “unknown[不明確]” である場合>に定冠詞を使ってしまったときは、後置修飾語を使って“説明を加えて [情報を追加して] ”, 聞き手にとって “known [明確] ” であるようにしなければならない。

(1a) (*) Have you talked to <the people> yet?

(聞き手の反応：「どの人のことかわからないね」)

(1b) (○) Have you talked to <the people you said you would>?

(聞き手の反応：「あ～、あの人とあの人のことか」)

(2a) (○) I had < ϕ curry> for lunch. (ϕ は無冠詞の意, curry は不可算名詞.)

(2b) (*) I had <the curry> for lunch.

(聞き手の反応：「どのカレーのことかわからないね」)

(2c) (○) I had <the curry that you had cooked for me>.

6. 「参考書や教科書にみられる冠詞用法に関する説明不備」

6-1. 「ある“冠詞活用のための参考書”にみられる説明不備」

(引用はじめ)：

・名詞を修飾する語句あるいは節が名詞の意味を特定あるいは限定する場合は the がつく。修飾語句がついても必ずしも特定・限定するわけではなく、特定・限定するか、しないかの判断はむずかしいことである。(特定・限定する場合とはどういう場合かという) 修飾語句が情報を受け取る側から見て、特定あるいは限定するのに十分な意味を含んでいる場合という抽象的な表現にとどめておく。

・先行詞の冠詞が問題になるのは関係代名詞の場合は限定的用法であるが、しかし、この「限定的」という言葉は初心者にとってまぎらわしい。この言葉は、限定的用法の場合 the がつくのが一般的で、the がつかないのが例外的であるような印象を与えるからである。むしろ the がつかないほうが多いのである。関係代名詞による修飾の場合にも、他の修飾語句の場合と同様、the がつくかつかないかは情報を受け取る側が関係代名詞節のもつ意味で特定あるいは限定できるかどうかにかかっている。

・(1a) This is the book which I bought yesterday.

(1b) This is a book which I bought yesterday.

(1a) が正しいか、または (1b) が正しいか。この問題のむずかしさは両方とも成り立ち、しかもその用法がはっきりしない点にある。

この問題が従来文法書や参考書でどのように取り扱われてきたか整理してみると、次の2つの考え方に分かれる。

(I) 私が昨日買った本が1冊の場合は the を用い、2冊以上買った本の1冊を示している場合は a を用いる。

(II) 冠詞の用法は「昨日私が本を買った」ということを聞き手が知っているか、知らないかによって異なる。知っている場合は1冊の場合は the, 2冊以上は a を用いる。知らない場合はたとえ1冊の場合でも a を用いる。

・ I の考え方をとっているもの：

①ポール・マクベイ，大西泰斗著『ネイティブ・スピーカーの英文法』研究社出版. P 20

②熊山晶久著『英語冠詞用法辞典』大修館書店. P 237

③江川泰一郎著『英文法解説（改訂3版）』金子書房.p117（ただし例文は，This is a (the) map I borrowed from Bill.となっている）

④富井篤著『続 技術翻訳のテクニック』丸善. p73(ただし例文は，This is a (the) machine that was returned here yesterday.となっている）

・ II の考え方をとっているもの：

①『英語語法大事典』大修館書店. p332（ただし，この本では「話相手が全然「私がきのう辞書を買った」ということを知らなかったとしたら，a dictionary.....という場合もありうるのです」となっており，the を使う場合があることもほのめかされている）

②正保富三著『英語の冠詞のわかる本』研究社出版. p42（この本では，話し手が本を買ったことを聞き手が知っている場合には，関係代名詞節は特定する働きをしており，そうでない場合は説明するだけの働きしかない，としている）

事実はどうなのであろうか。著者が尋ねたネイティブによれば，話し手が本を買ったことに関する情報を，聞き手が全く持っていない場合には，話し手が1冊の本を示す場合，買った本の冊数に関係なく a を用いる。他方，聞き手に本を見せる前に聞き手との間で問題にした本が1冊の場合には the, 2冊以上の場合の1冊には a を用いるとのことであった。事実はどうやら I ではなく II のようである。

そこで，話し手が昨日，本を買ったという事実を聞き手が全く知らなか

った場合、関係代名詞に特定する働きがなく、1冊の場合でもaを用いるのはなぜかという疑問が残る。

この問題を解くためには、関係代名詞の修飾により情報の受け手が特定できる、あるいは限定できるとはどういうことかを明らかにする必要がある。関係代名詞節による修飾の場合、特定あるいは限定できるかできないかは関係代名詞節のもっている情報にかかっている。(引用終わり)

あちらへこちらへと「迷走」する著者の説明に学習者は戸惑いを感じる。この参考書が引用したくいろいろな文献にみられる説明内容>は、文脈に応じてそれぞれ正しいので、「Iが正しいかIIが正しいか」という命題そのものの設定のしかたにもすでに無理がある。多くの参考書や教科書が多用する「特定あるいは限定」というキーワードだけでは参考書を読む学習者の納得を得られる説明ができないことが分かる。

冠詞に関するつぎのような本質を理解する必要がある：

(1) ある対象[こと・もの]に対して“話し手[書き手]”の側から見て、それが“聞き手[読み手]”にとってknownであると考えれば“話し手[書き手]”はtheという指標を使う。また、“聞き手[読み手]”にとってunknownであると考えれば“話し手[書き手]”はaという指標を使う。

(2) theという指標は「それで全部であって、他に同じ“もの・こと”はない」という意味をあらわす。aという指標は「それで全部ではなくて他に同類の“もの・こと”がある」という意味をあらわす。この根源の意味をまず理解する。

(3) つぎに、前項(2)から連想される集合の概念を理解する。theを使う場合には英語母語者には「異質集合」が意識されていること、aの場合には英語母語者には「同質集合」が意識されていることを理解する。

(4) そして、「先行詞を含めてある名詞句がtheを要求するかaを要求す

るかは、後続する制限用法の節や句には関係なく、前項(1)(2)(3)にもとづく冠詞の用法によって決まる」ことを想起する。

以上の4点を基準としてこの参考書があげた次の例文における冠詞の使い方について考察する：

(1a) This is the book which I bought yesterday.

(1b) This is a book which I bought yesterday.

A = 「“book which I bought yesterday” という名詞句」とすると、

(2a) This is the A.

(2b) This is a A.

のように書き換えることができる。

・A という対象に対して話し手 [書き手] の側から見て、それが聞き手 [読み手] にとって known であると考えれば話し手 [書き手] は the という指標を使って (2a) = (1a) のように言う。聞き手 [読み手] にとって unknown であると考えれば話し手 [書き手] は a という指標を使って (2b) = (1b) のように言う。

・A という対象を「それで全部であって、他に同じ物はない」という意味にしたいときは the という指標をつかっては (2a) = (1a) のように言う。A という対象を「それで全部ではなくて他に同類のものがある」という意味にしたいときには a という指標をつかって (2b) = (1b) のように言う。

・英語母語者が認識する {異質集合：A, B, C, D, ...} を想定して、B でもなく、C でもなく、D でもなく、...実は A を指示同定したいのだとす

るときは the という指標をつかつては (2a) = (1a) のように言う。英語母語者が認識する{同質集合：A1, A2, A3, A4, ...}を意識してこの集合のなかから任意の A というエレメントを想定するときは a という指標をつかつては (2b) = (1b) のように言う。(補足：異質集合の例：{鉄, 鉛, 金, 銀,}, 同質集合の例：{少年1, 少年2, 少年3, 少年4,})

・<先行詞を含めてある名詞句>が the を要求するかあるいは a [an] を要求するかは<後続する関係詞節>には関係ない：

(3a) This is <the book which I bought yesterday>.

第一の意味：「<昨日購入した本>について先ほどお話ししたのもうあなたはご存知なんですけど、これがその<昨日購入した本>なのです。」

第二の意味：「<昨日購入した本>はこれ一冊だけです。ほかにはありません。」

= This is <the only one book which I bought yesterday>.

第三の意味：「買った本には、「昨日買ったもの」、「一昨日買ったもの」、「先週の日曜日に買ったもの」などいろいろあるのですが、これはとくにそのなかでも「昨日買ったもの」です。」(文末焦点の観点からみればいつ購入したか、ということが話し手から聞き手に伝えたい一番大切なポイントである。)

「昨日買った本」=A, 「一昨日買った本」=B, 「先週の日曜日に買った本」=C,として「いろいろな時期に買った本」の集合を考え、この集合を{A, B, C,}とするとき、この集合のなかの B でもなくて C でもなくて Aこそを指示同定したいときは the という指標をつかつて<the book which I bought yesterday>.とする。

(3b) This is <a book which I bought yesterday>.

(意味)「<昨日購入した本>は少なくとも二冊はあるのですが、これはその一冊です。(ほかにも<昨日買った本>があります。)」

「昨日購入した本」=A として、「昨日購入した本」の集合を考えてこの集合を {A1, A2, A3, A4, A5,} とし、この集合における任意の一冊を表現したいときには、<a book which I bought yesterday> とする。

この参考書の著者が述べた疑問点を再記する：

「話し手が昨日、本を買ったという事実を聞き手が全く知らなかった場合、関係代名詞に特定する働きがなく、1冊の場合でも a を用いるのはなぜかという疑問が残る。」

この参考書の著者は「関係代名詞には特定する働きがなく」と説明した。book に対してその book がどういう book であるのかを説明するために話し手は、which I bought yesterday という情報を追加して、「本は本でもこういう本です」としている。このように情報を追加することを、多くの文法書や教科書は「限定する」または「特定する」という用語で説明している。だから、“book という名詞単体の情報”と“book which I bought yesterday という名詞句があらわす情報”とを対比してみると、後者のほうは前者に比べてより限定された、あるいは特定されたくわしい意味内容の情報になっている。だから、関係代名詞節は book を特定する働きをしていないのではなくて、特定する働きをしている。しかし、特定しているからといって the が使われるとは決まっていない。

次に、この book which I bought yesterday という名詞句の形式をもつ情報を仮に“X”と名づける。つまり、“「昨日購入した本」=X”としてみる。昨日購入した本は二冊以上の複数冊である。これを集合という概念をつかって表現してみると、「昨日購入した本の集合」={X1, X2, X3, X4,}となる。この集合の中から任意の一冊をとりだすときに、英語という言語は、a という標識を用いる。逆にいえば、英語を母語とする人々が a を使うときは、同類のものが複数個ある、あるいは同類の人が複数人

いることを示唆している。I am a boy. の意味は、「私と同じような少年はほかにもいますが、私はそういう少年のうちの一人です」であったことを想起すれば、以上のべたことを納得できる。だから、何冊かのうちの1冊であれば、「1冊であっても a を使う」。a は、book という先行詞のみにかかっているのではなくて、book which I bought yesterday という名詞句の全体にかかっている。

6-2, 「ある“大学教科書”にみられる説明不備」

(引用はじめ)：

先行詞に付けられた冠詞 the は, (1a) (1b) のように、関係詞節の中に最上級が含まれている場合には inclusive の意味を表すものと理解してよいでしょう。

(1a) This is the book that impressed me the most.

(1b) This is one of the books that impressed me the most.

しかし、関係詞節に最上級をともなっていない文では、先行詞につけられた the は known の意味を表す指標であると理解した方がよいように思われます。関係詞節は、問題となっている先行詞があらしているものを聞き手が容易に推量できるようにと、すでに known となっている情報を話し手が親切心から付け加えてあげたものにすぎないのです。たとえば、(2a)の文において、先行詞 book に the が付けられているのは、元になった My father bought a book yesterday. という前提がすでに聞き手にとって known の情報となっていると話し手が考えているためであると言ってよいでしょう。また、この the が inclusive の the ではなく known の意味を表す the であり, my father bought yesterday の部分は聞き手が容易に推量の幅を狭められるようにと話し手が親切心から付け加えたものであるというかぎ

りにおいてではありますが、This is the book という部分までで文を切
ってしまっても、コミュニケーションは十分に成立するはずです。従来の
ように、必ずしも数に意味の中心が置かれているわけではない (1a) の文
と、「一冊だけ買った」ということを明確に意味している (1b) とを、まっ
たく同義文であると断定してしまう説明はやや行き過ぎかもしれません。

(2a). This is the book my father bought yesterday.

(→ My father bought a book yesterday, and this is the very book.)

(2b) This is the only book my father bought yesterday.

他方、(3a)において、先行詞 book に冠詞 a が付けられているのは、この文の元となった His father bought some book or other yesterday という前提自体が聞き手にとってまだ unknown の情報であると話し手が考えているからであって、必ずしも数に意味の重点が置かれているからではないようです。とすると、「何冊か本を買って、それらのうちの一冊だから冠詞は a である」という従来の説明はあまり妥当なものではないということになり、(3a) の文と「何冊か買った」ことをはっきりと明示している (3b) の文とがまったく同じ意味を表しているとする解釈も適当ではないとい
うことになります。

(3a) This is a book his father bought yesterday.

(→ His father bought some book or other yesterday, and this is one such book.)

(3b) This is one of the books his father bought yesterday.

(引用終わり)

① 混乱の第一点は「先行詞に付けられた冠詞 the」という冒頭の文言である。この文言が著者の説明全般にわたる混乱の大きな原因である。（「付ける」は適切な表現ではないけれども、仮にこの「付ける」という表現を使うことにして）「冠詞は、＜先行詞という名詞＞に付いているのか」それとも「冠詞は、＜“先行詞の意味内容を掘り下げる役目をしている後続の関係詞節までも含んだ名詞句”の全体＞に付いているのか」といえば、答は後者である。先行詞を含めてある名詞句が定冠詞を要求するか不定冠詞を要求するかは、後続する節や句には関係なく、それぞれの冠詞の用法によって決まる。

② 混乱の第二点は次の部分に起因する。

「この the が inclusive の the ではなく known の意味を表す the であり、my father bought yesterday の部分は聞き手が容易に推量の幅を狭められるようにと話し手が親切心から付け加えたものであるというかぎりにおいてではありますが、This is the book という部分までで文を切ってしまっても、コミュニケーションは十分に成立するはずです。」

「inclusive の the か、それとも known の the かという説明」か、という著者の命題に対する答は「多くの場合、談話のなかの文脈に依存して決まり、そのどちらかである、という場合もあるし、その両方を兼ね備えた意味になると考えてよい場合もある」である。だから、ある談話から切り取られたあるひとつの文だけを対象にして、それがどちらの意味に属する the であるのかを議論することには、あまり大きな意味はない。

さらに「known の指標としての the」と「追加情報」に関する考え方についても混乱がみられる。

(4a) This is <the book>.

(4b) This is <the book my father bought yesterday>.

話し手が聞き手に情報を伝達する場合、(4a) (4b) のどちらを使うか、その鍵は話し手が握る。

(4a)は、ある“名詞情報 [book]”に対して話し手としてはなんらの情報を追加しなくとも「聞き手には known である」と話し手が想定する場合である。たとえば、聞き手がすでに過去のある日に話し手から当該の本についてなんらかの情報を聞かされていた、というような場合には、話し手は、聞き手が当該の本について了解済みであると考えて (4a) のように発言する。「これが (先日君に紹介した) 例の本だよ」というような場合である。

しかし、「聞き手にとって known である」とするために情報の追加が必要であると話し手が判断する場合には、(4b) のようにその“名詞 [book]”の直後に“修飾語 [postmodifier]”を後置接触させてその意味内容をせまくしてゆく。そうすれば、聞き手は先行詞を含む“名詞句 [book my father bought yesterday]”がどんな種類の本を話し手が指しているのかを了解しやすくなる。いいかえれば、話し手の側から修飾語を追加することによってある名詞の指している意味内容を限定したり特定したりしてゆけば、聞き手は話し手の伝えようとしている情報内容を理解しやすくなる。＜情報追加＞とは、つまり、ある名詞（または名詞句）に修飾語を後置させることである。そして、後置修飾語とは＜広義の形容詞＞に相当する。話し手が (4b) を発話する場合は次のような場合である：話し手は、聞き手が (4a) の発話内容だけではどんな種類の本であるのかわからないだろうと、考える。そこで、さらに情報を追加する。情報を追加すれば、聞き手にもどんな種類の本なのかが了解できるはずである、と考える。

③ 「従来のように、必ずしも数に意味の中心が置かれているわけではない (1a) の文と、「一冊だけ買った」ということを明確に意味している (1b) とを、まったくの同義文であると断定してしまう説明はやや行き過ぎか

もしれません。」の部分も混乱の原因となる。文の構造が異なれば確かになんらかの違いあるのが普通である。だから、両者が「まったくの同義文である」とはだれにも断言できない。しかし、文脈からみれば「事実上ほとんど同じ意味になる」場合は多い：

(2a) This is the book my father bought yesterday.

(2a) は文脈によって次のような意味になる。

This is <the book which my father bought yesterday>.

第一の意味：「<昨日父が購入した本>について先ほどお話しましたのもうあなたはご存知なんですけど、これがその<昨日父が購入した本>なのです。」

第二の意味：「<昨日父が購入した本>はこれ一冊だけです。ほかにはありません。」

= This is <the only one book which I bought yesterday>.

第三の意味：「父が買った本」には、「昨日買ったもの」、「一昨日買ったもの」、「先週の日曜日に買ったもの」などいろいろあるのですが、これはとくにそのなかでも「昨日買ったもの」です。」(文末焦点の観点からみればいつ購入したか、ということが話し手から聞き手に伝えたい一番大切なポイントである。)

「昨日買った本」=A, 「一昨日買った本」=B, 「先週の日曜日に買った本」=C,として「いろいろな時期に買った本」の集合を考え、この集合を{A, B, C,}とするとき、この集合のなかのBでもなくてCでもなくてAこそを指示同定したいときはtheという指標をつかって<the book which I bought yesterday>とする。

④ 「(3a) の文と「何冊か買った」ことをはっきりと明示している (3b) の文とがまったく同じ意味を表しているとする解釈も適当ではないということになります」の部分も混乱の原因となる。

[(3a) = (3b)] を否定している点について考察する。文の構造が異なれば確かになにかしらの意味が異なることになるのが普通である。だから、両者が「まったく同一の意味」であるとはだれにも断言できない。しかし「事実上ほとんど同じ意味である」とは言える。なぜなら、a という不定冠詞は、「これ以外にも同類の “もの・こと” がある」ということを表わす標識だからである。

(3a) This is <a book which my father bought yesterday>.

(意味) 「<昨日父が購入した本>は少なくとも二冊はあるのですが、これはその一冊です。(ほかにも<昨日父が買った本>があります。)」

「昨日父が購入した本」=A として、「昨日父が購入した本」の集合を考えてこの集合を {A1, A2, A3, A4, A5,} とし、この集合における任意の一冊を表現したいときには、<a book which I bought yesterday> とする。

7. 結言

多くの参考書や教科書に提示されてきた「名詞の後にその名詞を限定する節が続くと、その名詞には the をつける(=制限的用法の関係詞節が続くと先行詞は定冠詞を伴う)」という表現は、今後は削除されてゆくほうが望ましい。先行詞を含めてある名詞句が定冠詞を要求するか不定冠詞を要求するかは、後続する形容詞節には関係なく、それぞれの冠詞の用法によって決まる。

英語は左から右へと流れるので「制限的用法の関係詞節を後続させた先行詞」というような右から左へと逆流してゆくような表現は好ましくない。英語は、流れの後方から分析して話したり書いたりする言語ではないからである。「ある名詞情報に “新たな情報 [例えば関係詞節] ” を追加して “聞き手が了解しやすい情報 [名詞句] ” に変えてゆく」というような左

から右への流れに沿った表現のほうが好ましい。

「名詞句に対して a や the をつける」という言い方も実はおかしい。“マーク・ピーターセン (1988:12) 風”にいえば「先行して意味的なカテゴリーを決めるのは a や the であり、そのカテゴリーに適切な名詞句が選ばれるのはその次である。」この観点からすれば、a が何を表わす標識であり、the が何を表わす標識であるのか、冠詞用法の根本をみきわめることがきわめて重要であり、英語を話すときや書くときには、まずこの根本を意識しながら a にするのか the にするのかを決めて、つぎにこの a や the に適切な名詞ないしは名詞句を選択する。このプロセスに習熟してゆく方法のひとつとして、「幼児のころからの成長の過程において英語を母語とする人々の思考プロセスの根本に刷り込まれてしまっている（と思われる）集合概念」を認識・意識してゆくことが有効である。

（本稿は、大学英語教育学会第39回全国大会（2000年11月、沖縄国際大学）においての口頭発表内容とハンドアウト資料内容に対して補足内容を追加して文章化したものです。）

《参考文献》

- ・相沢佳子. 1999. 『英語基本動詞の豊かな世界』東京：開拓社
- ・秋山登志之. 1995. 『冠詞のミステリー』東京：南雲堂フェニックス
- ・荒木博之. 1994. 『日本語が見えると英語も見える』東京：中央公論社
- ・Azar, Betty Schramper. 1989. *Understanding and Using English Grammar*. New Jersey: Prentice Hall Regents. 小田眞幸 (訳) 1997. 『エイザーのわかって使える英文法』東京：プレントゥスホール出版.
- ・Berry, Roger. 1993. *ARTICLES*, London: HarperCollins Publishers
- ・Biber, Douglas., et al., 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Essex: Pearson.
- ・Blender, Alan S. 1989. *Three Little Words A, An, The*, 東京：マグロ

ウヒル出版

- ・ 智原哲郎・他. 1995. 『ENGLISH ENERGIZER』 東京：北星堂書店
- ・ Claire, Elizabeth. 1988. *Three Little Words: A, An, and The*. IL: Delta Systems.

- ・ 江川泰一郎. 1991. 『英文法解説 改訂三版』 東京：金子書房
- ・ Fergusson, Rosalind. 1985. *THE PENGUIN RHYMING DICTIONARY*, London: Penguin Books Ltd.
- ・ 藤枝善之. 1999. 「冠詞と集合」 大学英語教育学会 英語辞書研究会ワークショップ発表時のハンドアウト資料 (1999年12月).

- ・ Halliday, M.A.K. & Hasan, Ruqaiya. 1976. *Cohesion In English*, New York: Longman
- ・ 萩野俊哉. 1998. 『ライティングのための英文法』 東京：大修館書店
- ・ 萩原文彦. 1999. *Yokohama Current English Club Bulletin*, 第36巻第6-7号.
- ・ ハーディ, ヴァネッサ. 加藤恭子編訳. 1993. 『英語の世界 米語の世界』 東京：講談社
- ・ 原田豊太郎. 2000. 『技術英語の冠詞活用入門』 東京：日刊工業新聞社
- ・ 長谷川瑞穂・木全睦子. 1999. *English Grammar Today*, 東京：朝日出版
- ・ ヘッドブルーム, アラン・鈴木俊夫. 1998. 『ネイティヴに近づく英語』 東京：丸善
- ・ 日木 満. 1999. 「英語冠詞の異文化性の正体……名前のないカテゴリー」……『国際文化学への招待』 pp85-100, 東京：新評論
- ・ 平子義雄. 1999. 『翻訳の原理』 東京：大修館書店
- ・ 本名信行. 1999. 『アジアをつなぐ英語』 東京：アルク

- ・ 市川繁三郎 (代表編集). 1996. 『CD-ROM 版 新編 英和活用大辞典』 東京：研究社出版
- ・ 池上嘉彦. 1991. 『<英文法>を考える』 東京：筑摩書房
- ・ 池内正幸. 1985. 『名詞句の限定表現』 東京：大修館書店
- ・ 伊藤, ケリー. 1999. 『耳でわかる英文法 ③冠詞』 (CDブック) 東京：研究社出版
- ・ Indiana State University. <http://isu.indstate.edu/writing> 1999. *Resources For Writers*

- ・金井公平・他. 1994. 『オーソドックス英文法』 東京：弓プレス
- ・金口儀明. 1970. 『英語冠詞活用辞典』 東京：大修館書店
- ・川内彩友美（編）・マッカシー，ラルフ（訳），1997. 『日本昔ばなし』 東京：講談社
- ・木村太郎. 1999. 「太郎の国際通信」 東京新聞（1999. 6. 12）
- ・小泉賢吉郎. 1989. 『英語のなかの複数と冠詞』 東京：ジャパン タイムズ
- ・小林 薫. 1999. 『英語通訳の勘どころ』 東京：丸善
- ・熊山晶久. 1985. 『英語冠詞用法辞典』 東京：大修館書店
- ・久野 暉. 1978. 『談話の文法』 東京：大修館書店
- ・黒田和雄 & Canty, Vincent. 1986. 『英語は冠詞で完成する』 東京：リーベル出版

- ・マクベイ，ポール. 大西泰斗. 1995. 『ネイティブ・スピーカーの英文法』 東京：研究社出版
- ・松井力也. 1999. 『「英文法」を疑う』 東京：講談社
- ・ミントン，T.D. 著 安武内ひろし訳. 1999. 『日本人の英文法』 東京：研究社出版
- ・ミルワード，ピーター. 林 久男（訳）. 1981 『ミルワード氏の英文法』 東京：研究社出版
- ・水野光晴. 2000. 『中間言語分析 英語冠詞習得の軌跡』 東京：開拓社

- ・中原道喜. 1997. 『マスター英文法』 東京：吾妻書房.
- ・西田 透. 1992. 『英語は冠詞だ』 福岡：石風社
- ・西田 透. 2000. 『英語は冠詞だ』 東京：開拓社
- ・西村 肇. 1995. 『サバイバル英語のすすめ』 東京：筑摩書房
- ・西村喜久. 1997. 『これが a と the の謎の正体だ』 東京：明日香出版

- ・織田 稔. 1982. 『存在の様態と確認 — 英語冠詞の研究』 東京：風間書房
- ・大野 晋. 1999. 『日本語練習帳』 東京：岩波書店
- ・大島 眞. 1992. 『談話文法研究』 東京：リーベル出版
- ・大島 眞. 1997. 『日英両語の談話分析』 東京：リーベル出版
- ・Oxford Advanced Learner's Dictionary [OALD] on CD-ROM. 1997.

- ・ピーターセン，マーク. 1988. 『日本人の英語』 東京：岩波書店
- ・ピーターセン，マーク. 1999. 『英語感覚をみがく』 東京：岩波書店
- ・Purdue University. <http://owl.english.purdue.edu>. 1999. *The Purdue University Writing Lab on the Web*

- ・ランガメール編集部. 1996. 『THE がよくわかる本』 川越：有限会社ランガメール
- ・斎藤秀三郎, 松田福松 (訳編). 1953 『冠詞用法詳解』 東京：吾妻書房
- ・佐久間 治. 1996. 『英語の不思議再発見』 東京：筑摩書房
- ・佐久間 治. 1998. 『英語に強くなる多義語二〇〇』 東京：筑摩書房
- ・笹井常三. 1999. 『英語のスタイルブック』 東京：研究社出版
- ・佐藤宏彰. 1987. 『英語俳句』 東京：サイマル出版会
- ・佐藤紘彰. 1993. 『アメリカ翻訳武者修行』 東京：丸善
- ・佐藤紘彰. 1996. 『訳せないもの』 東京：サイマル出版会
- ・サリバン, グレン. 1993. 『「日本人英語」のすすめ』 東京：講談社
- ・清水義次. 1999. 『英字新聞を読む』 東京：丸善
- ・志村史夫. 1995. 『理科系の英語』 東京：丸善
- ・正保富三. 1996. 『英語の冠詞がわかる本』 東京：研究社出版
- ・杉本豊久. 1995. 「英語教科書作成の立場から」 『現代英語研究 (1995年6月)』 研究社出版
- ・鈴木寛次. 1997. 『発想転換の英文法』 東京：丸善
- ・鈴木寛次. 2000. 『こんな英語ありますか?』 東京：平凡社
- ・Swan, Michael. 1995. *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.
- ・竹中治郎. 1987重版. 『英詩法と鑑賞法』 東京：篠崎書林
- ・多岐川恵理. 1999. 『関係代名詞を使った英会話』 東京：明日香出版
- ・豊田昌倫. 1993. 『英語表現をみがく』 東京：講談社
- ・鳥山淳子. 1997. 「マザーグースの散歩道⑦」 『英語教育 1997.10』 東京：大修館書店
- ・The American Heritage Dictionary (Third Edition) on CD-ROM
- ・上田明子. 1997. 『英語の発想』 東京：岩波書店
- ・上田和夫. 1994. 『英米人のことばあそびうた 英語マザーグース集』 東京：西田書店
- ・八木克正. 1999. 『英語の文法と語法』 東京：研究社出版
- ・柳沢京子. 1996. 『英文対訳 きり絵一茶48句』 英訳：坂井孝彦, 英文監修：Frances, Ford. 東京：風塵社
- ・山口昌彦. 1991. 『英語・英文法重要用語辞典』 東京：南雲堂フェニックス
- ・山口誓子. 1993. *The Essence of MODERN HAIKU*, translated by

Takashi Kodaira and Alfred H. Marks, 東京：漫画人（文部省科学研究費補助出版）

- 吉田正治. 1995. 『英語教師のための英文法』 東京：研究社出版
- 吉田正治. 1998. 『続 英語教師のための英文法』 東京：研究社出版
- 四宮 萬. 1999. 『英語の発想と表現』 東京：丸善